

# いちばんすきなひとに



Photography by waco

I. 歌 曲 竹どんぼに (2009年)

詩 岸田 衿子 詩集『たいせつな一日』より

なにかが、ほら (2007年)

詩 能祖 将夫 (本作のための書き下ろし)

II. 歌曲集 『古風な月』 (2008年)

1. 湖上\*

詩 中原 中也 詩集『在りし日の歌』より

2. 月夜の家\*

詩 北原 白秋 雑誌『赤い鳥』童謡 第三集より

3. 月光\*

詩 島崎 藤村 詩集『若菜集』より

4. 月の光に与えて\*

詩 立原 道造 『拾遺詩篇』より

5. お伽噺\*

詩 新美 南吉 詩集『花をうかべて』より

III. 歌 曲 いっしょに (2016年)

詩 工藤 直子 詩集『のはらうたⅢ』より

IV. 歌曲集 『いちばんすきなひとに』 (2012年)

1. 僕はまるでちがって

詩 黒田 三郎 詩集『ひとりの女に』より

2. また昼に

詩 立原 道造 詩集『優しき歌Ⅱ』より

3. 二人の詩

詩 尾形 亀之助 詩集『色ガラスの街』より

4. 忘却

詩 堀口 大學 詩集『砂の枕』より

5. しぬまえにおじいさんのいったこと

詩 谷川 俊太郎 詩集『みんなやわらかい』より

歌曲集『古風な月』

一、湖上 詩 中原中也

ポツカリ月が出ましたら、  
舟を浮べて出掛けましょう。  
波はヒタヒタ打つでしょう、  
風も少しはあるでしょう。

沖に出たらば暗いでしよう、  
權から滴垂る水の音は  
昵懇しいものに聞こえましよう、  
——あなたの言葉の杜切れ間を。

月は聴き耳立てるでしょう、  
すこしは降りても来るでしょう、  
われら接唇する時に  
月は頭上にあるでしょう。

あなたはなおも、語るでしょう、  
よしないことよ拗言や、  
洩らさず私は聴へてしよう、  
——けれど漕ぐ手はやめなごで。

ポツカリ月が出ましたら、  
舟を浮べて出掛けましょう。  
波はヒタヒタ打つでしょう、  
風も少しはあるでしょう。

二、月夜の家 詩 北原白秋

壊れたピアノに、  
壊れ椅子、  
誰が月夜に弾いてか、  
誰もいもせず、音ばかり。

白い木槿に、  
青硝子、  
母様もしかと来て見ても、  
中には月のかげばかり。

ときどき光る  
眼が二つ  
黒い女猫の眼の玉が、  
それともピアノの金の錠。

壊れたピアノに、  
壊れ椅子、  
誰が弾くやら、泣くのやら、  
部屋には月のかげばかり。

空には七色、  
月の暈、  
いじりまで照るやら、照らぬやら、  
壊れたピアノの音ばかり。

三、月光 詩 島崎藤村

しずかにてらせる  
月のひかりの  
などが絶間なく  
ものおもわする

さやけきそのかげ  
こえはなくとも  
みるひとの胸に  
忍び入るなり

なさは説くとも  
なさをしらぬ  
うきよのほかにも  
朽ちゆくわがみ  
あかさぬおもいと  
この月かげと

いづれか声なき  
いづれかなしき

四、月の光に与えて 詩 立原道造

おまえが 明るく てらしすぎた  
水のような空に 僕の深い淵が  
誘われたとしても ながめたこの眼に  
罪は あるのだ

信じていたひとから かえされた  
あの つめたい くらいい 言葉なら  
古い泉の せせらぎをきくように  
僕が きいていよう

やがて夜は明け おまえは消えるだろう  
——あした すべてを わすれるだろう

五、お伽噺 詩 新美南吉

春になると神様は御掌をひらいて  
鶯をはなつてやるのです

鶯は田舎にとんでいつて  
手近なところからはじめます  
まず松林のよろこびを  
うたつてやる

松たちは満々として  
黙っている

土堤の草たちのぐちも  
うたつてやる

草たちはこれ以上望まぬと  
黙っている

一人でゆく雲のさみしさも  
うたつてやる

雲はとききをついて  
黙っている

牛と百姓のつたましいねがも  
うたつてやる

牛と百姓は立ちどまって  
黙っている

澄んだ泉の美しいのぞみも  
うたつてやる

泉はうれしくて  
黙っている

そのうち日暮がやって来る  
鶯はぐったり疲れます

夜になると神様はしげみの中に  
鶯をしまつのです

それから別の御掌をひらいて  
月夜をはなつてやるのです

(注)著作権の消滅している\*の詩のみ掲載しています。歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直して表記しています。

## 【ごあいさつ】

オール木下牧子作品による『新しい日本歌曲の演奏会』にお越しいただきましてありがとうございます。おかげさまでこのシリーズも今年で第4回を迎えることができました。本日お聴きいただきますのは、2007年～2016年に作曲された“新しい日本歌曲”です。初めてお聴きになる曲が多いかもしれませんが、聴き手と歌手がリアルタイムで詩を共有できるのが日本歌曲の大きな魅力でもあります。日本語の美しい詩を、色彩豊かな現代の日本歌曲をどうぞお楽しみください。

## 【プログラムノート】

歌曲「竹とんぼに」…木下さんの作品の中で最も演奏される機会が多い作品です。詩の岸田衿子さんは、空高くと手を擦り合わせる瞬間の心の揺れをシンプルな言葉を用いながらもダイナミックに描き、その想いを地平線を超えて真昼の星へととばします。

歌曲「なにかが、ほら」…柔らかく、温かい気持ちでホールを後にしてもらえるようにとアンコール・ピースとして作曲されました。明るく伸びやかな詩は脚本家・演出家として知られる能祖将夫さんの書き下ろしです。「目を閉じて、耳を澄ましてみてください」

歌曲集『古風な月』…明治から大正初期生まれの日本近代文学史上に名を残す詩人たちの「月」をテーマにした美しい詩に、木下さんならではの複雑で現代的な響きが色を差します。大正ロマンを彷彿とさせる幻想的なメルヘンの世界をお楽しみください。

歌曲「いっしょに」…野原の風や花、虫たちの声を集めた工藤直子さんの詩集『のはらうたIII』から、道端に咲く野菊の咲きをお届けします。無伴奏合唱曲から歌曲編曲された作品でピアノパートは新たに書き下ろされました。

歌曲集『いちばんすきなひとに』…黒田三郎、立原道造、尾形亀之助、堀口大學、谷川俊太郎といった5人の大詩人たちの詩を、恋の始まりから高揚、冷却、未練、昇華という流れに沿って並べたとても素敵な大人の恋の歌です。歌曲集のタイトルは、最後に歌われる谷川俊太郎さんの「しぬまえにおじいさんのいったこと」の感動的な一節からとられました。

## 【プロフィール】



**木下 牧子** 東京生まれ。管弦楽、吹奏楽からピアノ曲までその活動は幅広く、特にヴァリエティ豊かな声楽作品は抜群の人気を誇る。東京芸術大学作曲科首席卒業、同大学院修了。日本音楽コンクール作曲部門(管弦楽の部)入選。日本交響楽振興財団作曲賞入選。三菱UFJ信託音楽賞奨励賞受賞。主要作品に、オペラ「不思議の国のアリス」、ピアノ・コンチェルト吹奏楽「GOTHIC」、音楽物語「蜘蛛の糸」、2台ピアノのための「PUZZLE」、歌曲集「晩夏」、合唱組曲「方舟」他。今までに5回の作品個展を開催。出版多数、CDに「管弦楽作品集～呼吸する大地」(オクタヴィア・レコード)、「室内楽作品集～もうひとつの世界」(「レコード芸術」現代曲部門特選盤/ライブノーツ)ほか多数。

◎木下牧子公式サイト <https://kinoshitamakiko.com>



**金子 堅治** 東京生まれ。6歳よりピアノを学ぶ。会津高校在学中に声楽を藤村晃一、ピアノを秋月和子の両氏に師事。国立音楽大学声楽科(テノール)に進み田島好一氏に師事。バロック作品のほかシューベルト、シューマンを中心にドイツ・リートを学ぶ。会津大学短期大学部社会福祉学科では12年に渡り教壇に立ち多くの学生を指導。現在は自宅にて音楽教室を主宰。2003年よりおおるりコーラスの指導を続ける。2018年にオールバロック作品によるソロ・リサイタル(伴奏江川龍二氏)を開催し演奏活動を再開。同年オール木下牧子作品による『新しい日本歌曲の演奏会』のプロジェクトを開始。2019年『シリーズ第1回～へびとりのうた』、2020年『第2回～いちばんすきなひとに』(無観客収録)、2021年『第3回～愛する歌』を開催。郡山女子大学短期大学部非常勤講師。



**金子 理恵** 埼玉生まれ。4歳よりピアノを学ぶ。東京家政大学附属中学校・高校を経て玉川大学文学部英米文学科卒業。さらに同大学教育学部教育学科(幼児教育専攻)に学び、幼稚園教諭免許を取得。幼稚園勤務を経て、現在は自宅音楽教室にて幼児・児童への音楽指導を行うほか、合唱伴奏を中心に活動。歌曲伴奏にも本格的に取り組み、オール木下牧子作品による新しい日本歌曲の演奏会』シリーズでは全般にわたりピアノ伴奏を務める。また所属する『木の実シアター』では、幼稚園・保育園・福祉施設において長年音楽ボランティアの活動を行なっている。



『新しい日本歌曲の演奏会』vol.1～3のアーカイブ映像をご覧ください